

目加田誠先生と中国文学 1

— 『聊齋志異』 と誠先生 —

今まで昭和 8 年から 10 年まで目加田誠先生が中国北平（今の北京）で書き留めた『北平日記』を見てきましたが、これからは分野を広げて先生と中国文学の関連をご紹介したいと思います。

第 1 回は『聊齋志異』です。先生が訳文を發表されているわけではありませんが、先生とは深いご縁があります。理由は目加田誠先生が新聞のコラムに書かれています。先生が高校三年生だった時のこと、病気で 2 年間休学した後、学校に戻ると友人はみな大学に進み、取り残された寂しさを感じていました。また健康に不安をかかえていましたので、将来を思い煩っていた時に出会った本でした。柴田天馬氏の訳でしたが、その訳がとても気に入ったのです。そして大学で中国文学（当時は支那文学と言っていた）を選ぶきっかけとなったとも言えるとされています。

誠氏が柴田訳を気に入ったのは、原文の漢字をそのまま残しながら日本語ルビが凝（こ）っているからです。たとえば「西湖主」という短編ではこんな風です。原文「家貧」は「家が貧しい」とするところを「家がこまっていた」、「多言者」は「おしゃべり」、「小事忙迫」は「ちょっとした用事で忙しい」などと日本語としてわかりやすくしています。

【『聊齋志異』とは】

中国の清代（1644～1911）に蒲松齡（ほしょうれい）（1640～1715 年）がまとめた短編小説集です。昔の中国の文人は自分の書齋に名前を付けて「〇〇齋」と呼びました。蒲松齡の書齋は「聊齋」としました。「志（し）」とは、記す、書き留めるなどの意味で、「異（い）」とは、異なる、ふしぎ、あやしい、珍しいなどの意味です。「聊齋」で「異」を「志した」ので、その小説集は『聊齋志異』と呼ばれたのです。現在に伝わるものは、400 編（条）以上の短編からなります。内容は文字通り不思議な話です。冥界の話、幽鬼や動植物の精霊の話、地震大水などの天災の話などいろいろです。とても面白く今でも人気があります。

現在出版されている『聊齋志異』にはいくつかの種類があり、収められた小説の数にも違いがみられます。それでも基本的に 400 以上の短編小説が収録されています。日本でも複数の人の翻訳があり、収録数にも違いがあります。目加田誠先生は柴田天馬氏の訳したものが気に入りました。昭和 26 年（1951 年）に創元社から 10 巻の柴田氏訳『聊齋志異』が出版されています。本市所蔵の第 1 巻の裏表紙には柴田天馬氏が目加田先生あてに書いた「目加田先生 恵存 柴田天馬」の署名があります。このシリーズには本文総数 2,554 ページに 421 話が収録されています。1 話平均のページ数は約 6 ページになります。

どのお話からご紹介するか迷いますが、やはり、最初は第 1 巻第 1 話がいいのではと思います。「西湖主」という名の 18 ページ分のお話ですが、平均ページ数からすればやや長いお話です。不思議な世界の一端をご紹介しましょう。

【西湖主】

秀才の陳（ちん）は家が貧しかったので、副将軍の賈綰（かわん）の下で書記の仕事をしていた。洞庭湖（どうていこ）に舟を泊めていた時、揚子江ワニがいたので、賈綰がそのワニを弓で射ると背中に当たった。ワニの尾に魚がついていて逃げなかったので、二匹とも捕まえて繋いでおいた。ワニは苦しそうだったので、陳は賈綰に願って、ワニの傷口に薬を塗って二匹を逃がしてやった。その後一年あまり経った頃、また洞庭湖を渡った。船が転覆したが、無事に渡って進むと馬に乗った美しい女性だけの一団に出会った。人に聞くと西湖主が家臣を連れて狩をしていて、見つかると命がないとのことだった。陳はこわくなって逃げた。道を進むと、貴族の園亭のようなりっぱな御殿があったので、おそるおそる入ってみた。するとそこへたとえようもないような美しい 14・15 歳ばかりの少女とお供の腰元の女性たちが現われた。その少女はひとしきりブランコで遊ぶと奥へ入った。その後陳がそこへ行ってみると手ぬぐいが落ちていたので、それに詩を書いた。

腰元が陳を見つけ、手ぬぐいを受け取って中に入った。少女はその屋敷の娘（公主）で、陳が詩を書いたことは責めなかったが、母の妃（きさき）がそのことを知って怒って陳を呼んだ。陳がおそるおそる御前に進むと、妃は「あなたに助けられたワニです。大変失礼しました。娘をあなたに嫁がせます。」と言って、華やかな宴会をもよおしてくれた。数日御殿で過ごした陳は家のことが心配になり、使いを出すと、家では陳が死んだものと思って妻や子は喪服をつけていた。陳はしばらくそこで過ごして宝物をたくさん持って家に帰った。それ以後陳の家は何億という金持ちになり、日々お客を招いて宴会を開いた。子どもも 5 人も生まれた。どうしてそうなったか聞く人がいると、陳は少しも隠さずありのままを話した。

陳は 81 歳で亡くなったが、埋める時に棺があまりに軽いので、不思議に思ってあけてみると、棺の中は空っぽだった。

なんだか、浦島太郎のお話を連想しますね。

ワニは原本に猪婆龍（ちょばりゅう）と書かれていて、岩波文庫版には「揚子江龍（シナアリゲーター）」と解説されています。ここでは、わかりやすいように「揚子江ワニ」あるいは単純に「ワニ」としました。

洞庭湖は中国南部にある大きな湖で、この湖の北が湖北省、南が湖南省で、省を分けるほどの湖です。

また、現在、西湖は浙江省杭州市の風光明媚な湖を指す場合が多いようです。

